T I C O

Face to Face

TICOは保健医療・農村開発などの分野で、アフリカ・アジアで支援活動を行っている国際協力NPO法人です。
地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々とわかち合い、私たち自身のライフスタイルを振り返るとともに、地域の精神文化の昂揚に寄与することを目的としています。

TICO 季刊ニュースレター　No.29　2012年4月号

ザンビア
小学校及び看護師の家、完成！
ンコンジェ・コミュニティースクールとモンボシ・看護師の家が完工しました。
☞*p.2-3*

ザンビア
モンボシ地域の今
安全な妊娠出産支援事業で実施された、様々な活動の様子をお伝えします。
☞*p.4-5*

ザンビア
農村開発ローン
支援を受けたグループのその後についての調査結果をご報告します。
☞*p.6*

事務局
徳島県からの委託事業が終了しましたのでその報告と、離着任の挨拶をお届けします。
☞*p.7*

国際協力のあり方

~人命救助と持続可能性・自立発展性・効率性の狭間で~

TICO 代表　吉田　修

我々の主な活動地域であるチボンボ郡モンボシはもともと医療施設がなく、最寄りの病院までの距離は約30kmであった。JICAの支援で診療所建設、保健ボランティアの養成を行ってきたが、それでもこの診療所まで10~20km徒歩で受診する人が大勢いる。陣痛が始まってからではとても間に合わない。そこで今度は「お産を待つ家」の建設に至った。ザンビア政府・チボンボ郡当局も当初の約束通り、人員を配置し薬品等も支給し、地域のボランティアも積極的に活動して下さっている。今後、どこかの時点でTICOが引き上げても現状を維持、あるいはさらに発展していけると考えている。NGOの活動で常に評価されるポイント、持続可能性・自立発展性・効率性はまずまず合格点ではないだろうか。

しかし、アフリカにはかつてのモンボシのような医療にアクセスできない地域が限りなく存在する。今春1年ぶりにザンビアを訪問し、同じチボンボ郡のさらなる奥地への月2回の巡回診療に同行する機会を得た。助産師、HIVカウンセラー、看護師、運転手が参加し、診療・妊婦検診・乳幼児検診・家族計画など行う。ランドクルーザーで手すりにつかまり、それでも頭を打ちながら、幾つもの橋のない小川を越え走ること2時間、やっと目的地に到着する。住民が作った簡易な藁葺きの小屋で診療に毎回百数十人の受診者が列を作る。マラリアの蔓延地域であり、発熱者を簡易検査してみると80％ほどが陽性である。井戸もなく小川の濁った水を飲んでいる。病気が重症となると34kmの道のりを徒歩で病院へ向かうが途中で亡くなるケースもあるという。しかも、まだ奥地に多くの人が住んでいる。

アクセスの非常に悪い地域の人々を、アクセスが悪いから何もできない、介入は無理だと放置することは簡単で、要するにそこに行かなければそこの情報は上がってこないから解らない。我々は放置していることに気づかない。しかし、それではNGOの存在意義がない。命を助けたい、より良い社会を作りたいという思いから活動しているのだから。

では、NGOがどのような介入をするべきかと考えると、また途方に暮れる。限られた資金と人材でアクセスの非常に悪い地域で何かをすることは、上記のNGO評価ポイント、持続可能性・自立発展性・効率性を達成することが非常に難しい。助成金はまず取れないであろう。体力の範囲でできることを少しずつでもやるしかないし、TICOだけでは広い範囲をカバーできない。裾野を広げるために、
1）関心を持ち続け情報を発信
2）そこで活動する情熱ある人との連携を大切にし、補完し合えるような連携を図る
3）若い人材の参加を促し、次の世代を育成する
4）資金調達
が重要となってくる。

多くの団体や個人がアフリカの問題に関わり、人命救助と持続可能性・自立発展性・効率性のはざまで悩みながら、それぞれのやり方で活動する、そんな時代を想像しながらTICOはその誘導役を担いたい。
☞*p.3*へ続く

よしだ・おさむ：自称兼業農家（外科医）
徳島県出身。アフリカをはじめ世界各国にて国際医療支援活動を実施。現在吉野川市山川町のさくら診療所で地域医療を実践しながら、代表としてTICOを運営。
写真は今春ザンビアでスタッフたちと。

ンコンジェ・コミュニティースクール完成！！

瀬戸口千佳（業務調整員）

公益社団法人セカンドハンドからご支援を頂き、村人達が建設を進めているンコンジェ・コミュニティースクールですが、ついに校舎が完成しました！

子どもたちによりよい環境で勉強してほしい、と思うのは親の常ですが、首都ルサカから建設会社を連れて来て建てるのではなく、コミュニティーの協力で建てる、というのはなかなか難しいことでした。というのも、いままで政府から校舎建築の打診を何度となく受けてきましたが、すべて水に流れてしまっていたという経緯があったため、当初はコミュニティーの信頼を得るのが難しく、建設に必要な水を運んでもらったり、砂を提供してもらったりというコミュニティーからの協力を得るのが非常に困難でした。しかしながら、着工して建物が徐々に目に見えて来ると、その姿勢は一転。生徒数も、建設当初の2010年8月に500人弱だったのが、いまでは約600人と急増しました。机も十分な数が配置され、これからは4クラス同時に授業を行うことが出来ます。

▲基盤の石を砕く住民たち

▲お母さんたちもレンガ作りに挑戦

▲レンガが積み上げられていく校舎

猫目線

ただいま雨期のルサカより猫のチャイがお送りします。

今年は例年より早く雨が降り始めたザンビアですが、雨期の何がいいって、食べ物があること。事務所にマンゴーの木が生えているのですが、それがたわわに実をつけた頃は、毎日のようにご主人はそれを丸かぶりして「雨期はいいなぁ」とつぶやいていたので、きっと同じ気持ちに違いありません。

さて、こちらの人たちの主食であるトウモロコシもすくすくと育ち、早いところでは収穫が始まっている模様。茹でたり焼いたり、粉にして練ったり（シマと呼ばれる）、ジュースにしたりお酒にしたりと年中様々な形態で食されるトウモロコシですが、実は人間以外も食べるってご存知でした？何を隠そう、このチャイも猫まんまならぬシマまんまを日々食べているのですが、もっと大量に食べるお方がいらっしゃいます。

それは牛たち。本来、牧草だけで生きていける方々ですが、人間たちが脂の乗った肉を求めた結果、トウモロコシも食べるようになったそうです。そして飼料用トウモロコシは、こちらで大多数を占める天水頼みの小規模農民の畑とは違い、乾期でも大規模灌漑のおかげで青々としている商業農地で作られているとか。広大な土地で貴重な水資源を大量に使って育てられたトウモロコシが実も葉も茎も一緒くたに粉砕されてロール状の飼料になっている一方で、日々の食事に困窮する人が依然として多いという矛盾は、猫の私には到底理解できません。むしろ、この現状を知ったご主人のお友達が「bad manners（無作法だ）」とお怒りになった気持ちの方が分かる気がするチャイなのでした。にゃー！！

そして、第2校舎には鍵付きの金庫室ができました。試験用紙の保管ができないため、毎年ンコンジェ小学校の生徒たちは、朝７時から始まる小学校の卒業試験を受けるために他の学校まで何時間もかけて歩いていかなければいけない状況でした。おかげで試験が始まる頃には疲労困憊で、日頃の勉強の成果が出せないことも。郡の教育局からの了承が下りれば、卒業試験の問題用紙をこの金庫室に保管し、7年生はンコンジェ小学校で卒業試験を受けることができるようになります。

よりよい教育環境の整備を目指して、引き続き生徒用トイレと教員住宅の建設、また郡教育局には卒業試験の実施および教師の派遣を要請していきます。

なお、森山小学校及び木屋平中学校からのご寄付で教科書88冊・教師用指導書20冊を寄贈させていただいたことを、この場を借りてご報告いたします。どうもありがとうございました。引き続きご支援をよろしくお願いいたします。

▲完成した校舎の教室

▲校舎完工を記念して最初の授業は果物の木を植樹をしました

▲教科書を手にする生徒たち

「お産を待つ家」に先がけて完工を急いでいた「看護師の家」がついに完成しました！

お産を待つ家についても、内装はほぼ終了し、あとは外壁のペイントや排水溝の設置等を残すのみです。郡保健局からは看護師の派遣についてすでに前向きな返答をいただいており、進行中のお産を待つ家とナースの派遣が完了すれば、現在展開している「チボンボ郡地域住民が支える安全な妊娠／出産の支援事業」に大きな弾みをつけることになります。

☞*p.1*続き

連携の困難さ

国際協力のあり方、関わり方にも多様性があり、各団体・個人でポリシーが違いそれぞれのやり方がある。連携の構築は時に非常に困難であるが、これにはより良い人間関係の構築が基本である。昨年12月の地球人カレッジの平野キャサリンさんの講演をもう一度聞いてみよう。お互いの思い込み、偏った見方を乗り越えて、共通の目的を再確認するならば、それを達成するための連携のあり方が見つかるであろう。「大同小異」歩み寄れるはずである。

代表　吉田　修

ザンビア／チボンボ郡モンボシ
地域住民が支える安全な妊娠・出産の支援事業の今

演技を交えながら進められる研修のようす

酒井浩子（保健医療専門家）

コミュニティ啓発ワークショップ実施

モンボシでは、出産するのも赤ちゃんのケアをするのも女性ですが、陣痛が来たら病院で産むか否か、赤ちゃんの体調が悪いときどうするか等、最終的に家庭内でのさまざまな”決定”を下すのは夫である”男性”である場合が多いです。女性は病院で産みたくても夫が許してくれない場合もあります。そこで、男性から母子保健について理解と協力をもっと得られるよう、まずは、地域の男性にとって影響力のある人物の理解を得ていこう、ということで村長、宗教リーダー、学校教師などを呼んで啓発ワークショップを実施しました。ワークショップのテーマは村にある母子保健に関わる考え方や噂、伝統的習慣など。

他のザンビアの農村部と同様、モンボシには今も残る伝統的な言い伝えや習慣がたくさんあります。地域の結束を強める助けを担っているもの、モラルを保つために大きな役割を果たしているものなど良いものもある一方、ときに保健の活動を行なっていく際の障害となってしまうものもあります。医学的に根拠がないことが明らかなものでも、コミュニティで昔から言い伝えられている考え方や習慣はそう簡単に変わるものではありません。

研修のようす

ワークショップでは、母子保健に関係のある村で起こっていることや昔から伝わる考え方に着目し、話し合いを通じて参加者と一緒に伝統的な習慣等のうち母子保健に関わるものを取り上げ、ひとつ一つについて掘り下げ話し合い、整理していきました。

『Keep the best, Change the rest.（良いものは残し、残りは変えよう）』をテーマとしていたワークショップは、それぞれの立場からの意見で白熱した議論が繰り広げられました。

例えば、ビーズをつけたロープを腰に巻くことで避妊できると考え、近代的な避妊法を利用しないために望まない妊娠をしてしまった例、分娩時や新生児期に起こるトラブルは夫婦どちらかの浮気が原因であると考え、その対処法として薬草を飲む。その結果、病院への受診が遅れてしまうなどの問題が起こっている例などを取り上げました。

今回、モンボシ内の5カ所でワークショップを実施しましたが、どの会場でも盛り上がったのが、流産や難産、新生児に起こるトラブルの原因は夫婦どちらかの浮気が原因だという考えであるMasoto（現地語でマサトとかマソトと発音します）と呼ばれるものについての話合いでした。このMasotoについては、今でも多くの村人たちは、これが単なる信仰ではなく、「病気（疾病）」であると信じています。Masotoを発症した際には、薬草を飲んだり、夫のベルトを浸した後の水を飲んだり（！）といった治療法がとられるとのこと。

真剣な眼差しで研修を受ける参加者たち

講師や保健ボランティアの説明を聞き、Masotoという病気は存在せず、信仰であるという気づきを得た参加者も多い一方、特に年配の女性の間では、頑としてそれは病気であるという認識が変わらない人がいたのも事実。ただ、妊婦や新生児に問題があるときには病院に行けば問題が解決される可能性も高いことは納得していました。この背景には、Masotoには、「浮気すると、難産や赤ちゃんに問題が生じるよ。だから浮気はするな」というメッセージをもって、妊娠中に夫が浮気することを防ぐ、ある意味女性を守るためでもある伝統的な言い伝えの要素があるという意見もあります。

ワークショップ終了後、参加者からは「このような貴重な話し合いの機会がもててよかった。コミュニティにある昔からの考え方を変え、行動を変えるのは時間がかかることではあるが、自分たちでできることから、少しずつ取り組んでいきたい。子どもは未来の宝、すべての子どもは女性から産まれる。自分たちの伝統も大事だけど、命、健康を守ることを最優先に考えていけるような環境を作りたい」との声が聞かれました。

また、このワークショップは、普段は、村人の中でも保健の知識があり、近代医療も受け入れている保健関係のボランティアさんたちと話している私たちにとっても、地域の分野や伝統を改めて知る機会となり、さまざまな考え方があることが整理できました。これからも、地域に根ざした活動にするために、地域のことをよく知ることから始めていこうと初心に戻ったワークショップでした。

リフレッシャー研修実施

SMAG養成研修から1年が経ちました。知識のブラッシュアップを！ということで３日間のリフレッシャー研修を実施しました。

リフレッシャー研修を終えた参加者たち

メンバーたちは、養成から1年経った今も、地域のお母さんと子どものために、積極的に活動を続けています。

養鶏＆大豆栽培支援ローンの進捗報告

11月に養鶏研修が終了した養鶏事業は、鶏舎を建てる場所や規模などについてじっくり話し合いが行われ、担当メンバーの協力により作業が進み、立派な建物ができました。

鶏舎

大豆ローンも順調に月々の支払いが行われています。担当メンバーのマランボさんは、各地域を巡回モニタリングし、「今のところ、どのグループも順調に進めている。このローンを完済して、是非次につなげたい」と意気込みを見せてくれました。

自転車救急車６台追加投入

モンボシに9つある地域のうち3つの地域に、妊産婦さんが自宅から診療所まで行く交通手段を確保するための自転車救急車を昨年配置しました。それら３台はこれまでのところ、患者搬送のための手段として大活躍しています。今回、より多くの地域の人たちがヘルスポストにアクセスできるよう、6台の自転車救急車を追加投入しました。

投入した自転車救急車

2010年10月から始まった、ザンビア・チボンボ郡モンボシにて安全な妊娠・出産のための環境づくりを目標としたプロジェクト。JICA（国際協力機構）から「草の根技術協力事業」として委託を受けています。

ザンビア／チペンビ小規模農村開発ローン

卒業したグループのその後は？

黒田晶子（業務調整員）

1996年より実施してきた農村開発ローンは、チペンビで行われている小規模なビジネス支援です。チペンビで暮らす「何か事業を始めたくて、アイディアはあるけれど先立つものが....」という農民のグループに、元手として約3万円を貸し付けてきました。グループの自立を妨げないために、支援金は事業の利益から無利子で返済してもらっています。

グループメンバーが皆様から頂いたご寄付を通じてビジネスで利益を生み、彼らの生活を総合的に向上させることを目的として、2011年10月までに23事業、16グループの支援を行ってきました。

今回は、農村開発ローンの結果、彼らの生活にどのような変化があったのか、ローンを卒業したグループメンバーは今どうしているのか、追跡調査を行った結果をご報告します。

農業開発ローンに参加したメンバーは全部で16グループ。その中で、現在もグループとして存続しているのは10グループです。残りの6グループは、メンバーの引っ越し、組合の解散などの理由で残念ながら活動の中止を余儀なくされたようです。

さて、現在も活動を続けている10グループですが、彼らは現在どんな活動を行っているのでしょうか。ローンの申請当時と同じ事業を続けているグループは5グループ。シカ・グループやカリケンカ・グループは今でも当時と同じタックショップと呼ばれる売店を経営しています。グループが成功したのを知り、周りの住人達の中でもタックショップのビジネスを始める人が急増したため、今では競合相手がたくさんいて、利益をあげるのが大変だそう。シカ・グループもカリケンカ・グループも、養鶏や古着販売などの事業との多角経営を始め、並みいる競合相手にも負けずに活動しています。

残りの5グループは、現在ローンを申請した事業とは別の事業で頑張っています。養鶏事業でローンを申請したチロンダ・グループは、鶏の疫病が地域に流行したため、2009年からタックショップに事業内容を変更しました。メンバーの結束は今でも固く、売り上げから孤児の支援を行っています。その他肥料の共同購入を行っているグループや、メイズ販売の仲介を行っているグループなど、その後の活動は様々です。

農村開発ローンを卒業後、臨機応変に、そしてたくましく活動を行っているグループメンバーに、「TICOのローンに参加してから、あなたの生活にどんな変化がありましたか？」という質問をすると、皆さん口をそろえて、「ビジネスの知識を得る事が出来た」と答えて下さいます。「知識があれば、グループの活動だけでなく、自分で作った野菜や鶏を売る時、それを活かすことができるんだ。」とグループのメンバーは言います。

皆様から頂いた暖かいご支援は、しっかりとチペンビに根付いているようです。

チロンダ・グループのインタビュー風景

シカ・グループのお店のようす

カリケンカ・グループのインタビュー風景

離任のご挨拶

黒田晶子（業務調整員）

この度、2年間のザンビア事務所での業務を終了し、離任することとなりました。怒濤の2年間はあっと言う間に過ぎてしまいましたが、出来る限り現地の方に寄り添った形でのプロジェクト運営を心がけたつもりです。

始めての業務調整の仕事で右も左も分からない私に忍耐強く付き合って下さった先輩日本人スタッフの皆様、ローカルスタッフのみなさん、TICO関係者の皆様に深くお礼申し上げます。また、TICOの活動を支えて下さっている支援者の皆様にはどうお礼を申し上げてよいか分かりません。お一人お一人に直接お会いして、私とモンボシやチペンビのコミュニティーの皆さんからのお礼を申し上げたいくらいです。どうぞ今後とも引き続きTICOの活動へのご支援を頂けますようお願い申し上げます。

事業終了報告 ～国際保健医療と地域医療で活躍できる人材育成プログラム開発～

徳島県より委託を受け、国際保健協力と地域医療を組み合わせた研修医向けプログラムの開発を昨年8月から始め、この春3月で事業を終了しました。本事業は、国際貢献を志す医師を徳島県に集め地域医療を活性化させることを目的としており、ザンビアと日本で主に調査を実施してきました。

ザンビアでは、受入可能な海外研修先や、受入にかかる手続き、現地生活情報等に関して調べたところ、病院での学生研修があること、病院やNGOの活動地視察が可能な受入機関があることが明らかになりました。国内では、研修に対するニーズ、県内病院の受け入れ体制等を調査しましたが、医師・研修医・医学生を対象としたアンケートでは、海外研修へのニーズがあることはもちろん、国内での研修内容が充実していることや海外研修中の身分保障を求める声が結果として挙がりました。

また、医師が途上国の現状を直に学ぶことで医療の原点に立ち戻り、学んだ知識や経験を地域社会に還元できるということは、すでに国際保健協力と地域医療を実践しておられる医師のインタビューや報告から改めて学ぶことができました。

今回は研修プログラムの可能性を探ることで事業は終了しましたが、保健医療分野での国際協力と地域医療、ともに関心のある医療者への体制整備が今後徳島県を中心に構築されることを期待します。

離任のご挨拶

櫻井睦子（事務所長）

今回は10カ月と短い期間ではありましたが、事務所兼住居の引越し、ローカルスタッフの給与システムの変更、また医療人材受入プログラムの為の調査など、仕事は多岐に渡り、ザンビアで長く仕事をしてきた中でも経験していないような場面に遭遇する事も多々ありました。

その中で改めて感じたのは、本当に頼れるのは身近にいる現地の人々だという事です。支援する側の人間として、ややもすると上から目線になってしまうこともありますが、自分たちは他所からやって来てその国で仕事をさせてもらっているという事実を常に忘れず、カウンターパートやローカルスタッフをはじめとする現地の人たちを尊敬し信頼関係を築きながら良い仕事をする事が、未来にも繋がっていくと思いました。どうもありがとうございました。

伏見繭子（事務局員）

「日本の一地方である徳島で世界の中の日本を考え、それぞれが“地球市民”として生きる」。そんなTICOの理念に強く惹かれ、徳島にやってきました。TICOは私にとって一言でいうと「徳島のホットスポット」。環境・エネルギー・食・医療等様々な問題を知ることができ、自分の行動を変えるきっかけを得ることができました。

TICOでの勤務を通して得た出会いと学びは、私にとって大切な宝物となりました。物事を成し遂げることの難しさや、ふがいない自分を腹立たしく感じる時も多々ありましたが、普段からの小さな積み重ねや人との繋がりがいかに大切かということを実感しました。また、地域の繋がりの中で生きる楽しさ・温かさや、周囲に対する感謝の気持ちなどを、出会った方々の姿勢から学ばせていただきました。うまく言葉に表せませんが、本当に「ありがとう」の一言に尽きるように思います。楽しむ気持ちと人との絆を大切に、進んでいきたいと思います。本当に、ありがとうございました。

滝川麻衣（業務調整員）

ザンビアで業務調整として約１年間働かせて頂きました。いつも笑顔で助けてくれたザンビアの人たち、大変な時も励ましてくれた日本人スタッフ、そして何より日本から応援してくださった皆様がいたからこそやり遂げられた仕事でした。本当にどうもありがとうございました。青年海外協力隊としての2年間とTICOスタッフとしての1年間、計3年のアフリカ生活ですが、思えば常にまわりの人に助けられてばかりでした。一旦アフリカを離れて日本に活動拠点を移しますが、遠くない将来、恩返しのために再びアフリカの地に降りたいと思っております。皆様にもいつかきっと恩返しができますように・・・。

着任のご挨拶

瀬戸口千佳（業務調整員）

2009年より事務局スタッフとして国内事業および組織運営に携わって参りましたが、この度、ザンビア事務所付けとなりました。こちらに赴任してから事務局という立場からは見えない現地での苦労や困難がある（逆も然りですが）ことを実感し、いままでの在外スタッフの尽力に対し改めて心から感謝の念と敬意を覚えています。ザンビアの人たちとどう付き合っていけばいいのか、まだまだ手探り状態ではありますが、自分が出来ることを精一杯やっていきたいと思います。みなさんも是非ザンビアに遊びに来て下さいね！

事務局長 福士庸二のつぶやき 『シンプルライフ』

いきなりだが、「世の中、複雑すぎると思いませんか？」

Simple is the best.（シンプルが一番）
私が大事にしている言葉だ。

先日、あるテレビ番組で、タンザニアのハッザ族という部族の暮らしが放映されていた。彼らの狩猟採集型ライフスタイルは、ひと月と同じ場所に「定住」することなく移動して狩りや植物の採集を行う。そのため、家はなく家財道具などの持ち物は驚くほど少ない。敷物として使う毛皮、少しの着替え、水汲み用のポリタンク、煮炊きのための鍋ぐらいで、シンプルそのもの。物が溢れる日本で育った私などにとって、それでは不安で不便極まりないと思える生活だが、画面に映し出されたハッザの人々の表情は幸福感に満ち溢れていた。

「地球家族」（TOTO出版）という写真集がある。世界30カ国の家族とその家族が所有するすべての持ち物を家の前に運び出し撮られた写真。様々な国の気候や風土とそこに住む人々の暮らしぶりが見える。もちろん、日本の家族の写真も載っているが、あなたの家族とその暮らしはどう写るのだろうか？是非この写真集をご覧いただきたい。

ご支援ありがとうございました

TICOの国際協力活動は、皆様からの寄付金や会費によって支えられています。温かいご支援をお待ちしております。

寄付をいただいた方(書き損じはがき等含む)

河合純子、高木クニ子、石田亘良、唐住洲子、石岡ミサオ、公益社団法人セカンドハンド、青木君夫、佐藤文子、山下うやか、井上茂樹、さくら診療所募金箱、今心株式会社、高松聖ヤコブ教会婦人会、藤井節子、原田栄枝、北灘中学校、神園索己、桑原ヒサエ、村上亜由子、グレイシャスの会、鈴木朝子、橋本伸子、横浜市立鶴見中学校、河村征子、塩田勉、羽里ヨシミ、木屋平中学校、原田恵子、矢田安枝、片山ユリヤ、武岡、藤田、桜井一夫、安本カチエ、合同会社PlanB、川越敏良、森山小学校、TICOサポートクラブ、さくら診療所、関口鉄夫、福士庸二、吉田修、瀬戸口千佳、匿名5

書き損じはがきを集めています。

新たに入会された方

福井理予、野村、井賀崎麻里、中村佳夏、上原正敏、株式会社柚子りっ子、関口鉄夫、高田智子、白山靖典

会員を更新された方

関谷晴孝、田淵規子、田淵幸男、髙島百合、古家聖子、K's Pet Clinic、塩田勉、塩井英子、松島拓、北島コーポレーション、太陽と緑の会福祉事業団、石川良司、岩田祥三、森山庄八、金納千晴、坂東正章、山元博子、秋月益子、白石吉彦、山川浩市、石川富代、酒井雄二、笹井美由紀、関野聡美、大西和賀、砂田、松田千文、和田快、冨峯康代、佐藤晃、岡真澄、後藤田健二、匿名2

●2011年12月9日～2012年3月23日分
●順不同、敬称略

●東北被災地支援へご協力いただいた方のお名前の掲載は控えさせていただいております。なにとぞご理解賜りますようお願い申し上げます。

TICOへのご寄付の方法

郵便振替 — 01640-6-37649（加入者名）TICO
銀行振込 — 四国銀行　山川支店（店番号344）
普通 0199692
特定非営利活動法人TICO
代表理事 吉田修
カナ入力の場合は、トクヒ）テイコ
募金箱 — さくら診療所（徳島県吉野川市）に常設しています。
インターネット — TICOウェブサイトのバナー広告をクリックして、そこからお買い物していただくと、代金の一部が寄付されます。詳しくはホームページをご覧下さい。

TICOへの入会方法

会員となって資金面からもTICOの活動をサポートしてくださる方を募集しています。会員の方には、TICOニュースレター “Face to Face” を毎号お送りいたします。

年会費

賛助会員	個人	¥12,000
	学生	¥6,000
	団体	¥15,000
正会員		¥12,000

※通常は賛助会員でのご入会をお願いしています。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい。

入会ご希望の方は、年会費を郵便振替にてお支払い下さい。郵便局備え付けの振替用紙で、次の口座へお願いいたします。

口座番号 01640-6-37649
加入者名 TICO

ご住所・ご氏名・お電話番号の他に、Eメールアドレスもお持ちでしたら通信欄にお書き添え下さい。
なお、ゆうちょ銀行自動引き落とし、クレジットカード払いも可能です。詳しくはホームページをご覧になるか、下記までお問い合わせ下さい。

TICOニュースレター Face to Face 第29号
2012年4月発行　発行人：吉田　修
編　集：庄田　多江

特定非営利活動法人 TICO 事務局
〒779-3403　徳島県吉野川市山川町前川120-4
電話／ファクス：0883-42-2271
メール：info@tico.or.jp　/　ウェブサイト：www.tico.or.jp